

保護猫との出会い

二年 原口結衣

今年の四月に猫を飼い始めた。今年に入ってから部活動や習い事などで忙しくなり家族みんなでごす機会が減ってしまった。しかし、猫を飼ったことで毎日、家族全員が猫を撫でたりおもちゃで遊んだり、猫のことを話したりして、家族と共に過ごす時間が増えた。

飼っている猫の名前は「りん」という。りんが我が家に来たばかりの頃は、警戒していて、ケージを開けても出てこない。餌も私たちが寝ないと食べない、トイレも行かないという状態だったが今ではすっかりなついてくれている。私は中学二年生。思春期でイライラしたり疲れたりすることがあるがそんな時、猫と触れ合うことで気持ちが安らぎすつきりする。

りんはペットショップで買ったわけではなく、保護猫だ。りんのお母さんは捨て猫で、公園で子供を産んでしまった。りんはその内の一匹として保護されていた。私が行った保護猫施設は、小さな施設で、ボランティアの方が運営していた。施設では子供から大人の猫までたくさんいた。いったい全国には、どれほどの保護猫がいるのか気になって調べてみたところ、二〇一九年四月～二〇二〇年三月までのデータでは猫だけで約五万三千匹、その内殺処分数は約二万七千匹だった。このデータを見て、私

は驚く以上に悲しくなった。なぜなら保護されている猫の半分ほどが処分されてしまっているからだ。でも、この何万匹という数でも十年前と比べ保護猫数は約三分の一まで減少し、譲渡数が約二倍に増えているということだった。これは保護された動物を飼う人が増えた証拠であり、私は少しほっとした。

猫や犬だって人間と同じで一つの大切な命を持っている。しかし、処分せざるおえない数が保護されている。処分されてしまう動物たちを少しでも減らしていくためには私たちが引き取り、責任を持って最後まで飼い、動物の避妊手術を行って必要以上に子供を増やさないようにしていかねばいけない。私たちが今できることは動物たちが少しでも幸せに暮らせるようにしてあげることだ。初めから「自分は飼えないから関係ない」と目を背けるのか、「飼うことは難しいけど保護されている動物について調べてみよう」と、動物に目を向けるのでは、大きな違いがあると思う。

現在、暗い話が広がる中、動物は家族の会話を弾ませたり、人々の心を癒したり、明るくしたりする力を持っていると思う。

私は動物が大好きだ。

世界に住んでいるのは人間だけではない。

動物がいるから人間がいることを忘れてはいけない。